

第 1 学 年 道 徳 学 習 指 導 案

赤村立赤中学校

1. 主題「あっていいちがい、あってはならないちがい」を考えよう

資料 「ちがいのちがい」

2. 指 導 観

〈 主 題 〉

子どもたちは、周囲と「ちがうこと」に不安があり、そのことで生じる好奇の目や軋轢を避けようとする傾向がある。そして友だちと「同じ」であると思うことで安心感を得る。反対に自分たちと違うと思える友だちに対しては抵抗感をもったり距離を置いたりする。そのような見方・感じ方は、時に相手を冷たい目で見たり、無視したり誹謗・中傷を行ったりすることにつながる。そしていつの間にか自分たちとの待遇の「ちがい」を作り、相手を下に見て、その人物自体を否定したり排除したりする方向に発展し、イジメや差別につながる危険性をはらんでいる。

性差、個人の能力・嗜好や見方・考え方の傾向、宗教や民族、国や文化、生活の慣習等による「ちがい」を認めることは、個性尊重の視点であり国際理解の視点である。反対に、上述の性差などの「ちがい」による待遇の「ちがい」を作ったり看過したりすることは明らかに人権問題である。差別や偏見がもとになっているそのような「ちがい」の見方は、我々一人ひとりが積極的に否定していかなければならないことに子どもたちが気付くことが重要である。

本学習では、まず多様な個性が大事にされる社会で生きる幸せに気付き、人々に「ちがっていいんだ」という安心感を与える社会を皆で守る意義を考えさせたい。その上で日常生活の中で何気なく見過ごしたり、当たり前のように感じたりしがちな性差についての事例等に焦点をあてながら、何が尊重すべき「ちがい」で、何が否定すべき「ちがい」なのか、その線引きはどこにあるのかについて考えさせるようにしたい。そしてどちらの「ちがい」の場合にも人権が侵害される可能性があることを考えさせ、我々一人ひとりがその不当性や問題性に気付く感性、間違いの部分を見極める判断力、人権を守ることへの思いや配慮が態度や行動に表れる実践力等を身に付けていく大切さに気付いていけるようにしたい。

〈 生 徒 の 実 態 〉

本学級は、比較的少人数の学級である。男女間の隔たりもなく概ね良好な人間関係を保っている。しかし、小学校の時から1学級のまま進級して来ているため、人間関係が固定化している面がある。個人の性格や能力、対人的な立場等を周囲が決めて見ており、それからはみ出すことを許さない雰囲気も見られる。集団内の決まった立ち位置の中で、相手や周囲のメンバーによって自分の態度や言動を変えるような雰囲気もある。そのような中でも入学当初は緊張感もあり、男女やグループ間で大きなトラブルもなく過ごせていた。しかし、1学期の終わり頃から、中学にも慣れて集団意識が出始めたのか、男女のち

がいや所属グループのちがいが意識され出し、自分が大切にしたいと思う相手以外に対してはぞんざいな対応をしたり、些細なことでもめ事が起こったりすることが度々見られるようになってきている。

よって、この期に本主題に取り組むことは、本学級にとって大変意義があることであると考える。

〈留意点〉

導入では、価値への方向付けと本学習のすすめ方を確認するために、子ども達の身近な事例2つを取り上げ、無意識に「ちがい」による格付けが起こっている問題について考えるようにする。「アキヒロさんはスマホを使っているが、ユウコさんはガラケーを使っている。あってよいちがいか。」というような事例である。この事例の場合は、直感でも決めやすいので、ほとんどの生徒が「あってよいちがい」であると答えるであろう。理由は「好みの問題だから」「必要としているか、必要としていないかのちがいだから」などと答えるであろう。この答えやすい事例で考えることで、主活動で考えるその他の様々な事例に対して、①問題となるちがいは何から生まれているのか、比較すべき見方・感じ方は何かを明確にする、②「あってよいちがい」「あってはならないちがい」で結論を出し、その理由まで考えて自分の言葉で記述する、③皆でそれらの考え方を交流させることで、ちがいの見方を深め、正しい人権感覚を磨いていくようにするという学習のすすめ方について共通理解させていきたい。

その後、ワークシートの他の事例に対して一人一人が考えを確実につくることができるように、机間指導計画に基づいた支援を行う。特に、自分の考えを作りにくい生徒には早めに支援にあたるようにし、考えやすい事例について一緒に考えることで、学習への抵抗を軽減していきたい。

交流場面では、生徒の発言を適宜取り上げ、同じ意見でも理由が違う場合や、理由が同じに見えてもベースにある見方・感じ方が違う場合があることに気付かせ、話し合いの焦点化・深化を図る。そして、全員発言できるように指示・援助し、発言の共通点・差異点を整理することで、個人・個人でいろいろな考え方があるということにも気付かせたい。

さらに、自分の考え方が相手の立場に立った考え方か、人を侮った考え方になっていないか等を一人一人に判断させ、自分の言葉でまとめさせることで、差別的な違いを認めたり、気が付かなかつたりする見方・感じ方が自分にあってはならないことを自覚するようにしていきたい。さらに、固定的な見方しかできなくなっている自分に気付き、常に他者の変化に寛容である姿勢や、自分の価値観を更新し続けていこうとする態度の大切さにも思いが至るようにしていきたい。

2. 本時

(1) 本時のねらい

「あっていいちがい」「あってはならないちがい」を考えることを通して、利己的・排他的な決めつけや偏見に基づく「ちがい」の見方に気付き、性差別のような差別的な「ちがい」の見方はあってはならないことを理解し、偏見や差別をなくしていこうとする態度を身に付けることができる。

(2) 準備

教師 …私たちの道徳・「ちがいのちがい」ワークシート・掲示物

生徒 …私たちの道徳・筆記用具

(3) 展開

過程	学習内容・活動	形態	教師の支援・留意点	評価規準
つ か む 10 分	1 「ちがいのちがい」の例を提示し「あってよいちがい」か「あってはならないちがい」かを考える。	全	○「ちがい」についての2事例を考える場を設定することで、本時の価値への方向付けと学習のすすめ方の共通理解を図る。	○本時で考える価値について理解し、進んで考える意欲をもっているか。
	2 本時のめあてを確認する。	全	本時のめあて さまざまな「ちがい」について考えよう。	
深 め る 30 分	3 ワークシートの事例について「あってよいちがい」か「あってはならないちがい」かを、理由を明らかにしながら判断する。	個	○自分の考えを作りにくい生徒には、早めに机間指導を行い、さらに1・2の事例と一緒に考えることで抵抗を除くようにする。	
	4 グループで自分の意見を言ったり友達の意見を聞いたりして、それぞれの事例の「ちがい」についての考えを深める。 5 「あってはならないちがい」のそれぞれで共通している見方や考え方を交流し、自分の考えをまとめる。	グループ	○「あってよいちがい」 性差・嗜好・身体的特徴等 ○「あってはならないちがい」 性差別・人種差別・障害者差別等がもともになる仕分けや格付け等	○「あってよいちがい」と「あってはならないちがい」があるという考え方ができている。 ○「ちがい」に対する差別的な見方はあってはならないという方向で考えることができている。
ま と め 10 分	6 「私たちの道徳」P.72を読む。 7 本時の授業の感想を書く。	全	○「あってはならないちがい」に着目して、偏見や差別に関する考えや思いを書かせる。	○「ちがい」に対する差別的な見方をやめ、偏見や差別をなくしていこうとする考えを書くことができている。

3. 授業の様子

〈つかむ場面〉

例示1の「アキヒロさんはスマホを使っているが、ユウコさんはガラケーを使っている。」では、ほとんどの生徒が「あってよいちがい」であると判断し、「好み」や「家の状況」などが原因だからという理由を挙げることができた。例示2の「お母さんは娘には料理を手伝わせるが、息子には料理を手伝わせない。」では、ほとんどの生徒が「あってはならない」と判断していたが、数名の生徒は「どちらともいえない。」と答えていた。そこで、そのように考えた理由の交流を通して、一人ひとりの視点の違いによって判断が変わってくることを知る事ができた。また、この交流を通して、生徒は視点の持ち方、学習のすめ方を共通理解することができた。

〈深める場面〉

- ① マートンさんは肌の色が白いが、ゴメスさんは肌の色が黒い。
肌の色は生まれつきのものだから「あっていいちがい」。
肌の色は個性であって、同じ人間には変わらないから「あっていいちがい」。
- ② マラソン大会で、男子は5 km走り、女子は2 km走る。
男子と女子では男子の方が体力があるから「あっていいちがい」。
男子の中に体力のない子もいれば、女子の中に体力のある子いるので、「あってはならないちがい」。
体力の違いがあるから、あってもいいかもしれないけど、女子でも同じように走りた
いと思う人がいるから「どちらともいえない」。
- ③ しょうへいさんは、A先生の言うことは聞くが、B先生の言うことは聞かない。
人によって態度を変えるのは、差別だから「あってはならないちがい」。
B先生のことを軽んじているように感じる。
- ④ A駐車場では、〇〇ナンバーの車はとめられるが、B駐車場ではとめられない。
別にとめたって害はないし、そういうのは差別につながると思うから「あってはなら
ないちがい」。
ナンバーなんて関係ない。同じ車なんだから「あってはならないちがい」。
- ⑤ あきひろさんはカレーが好きだが、ゆうこさんはカレーが嫌い。
人それぞれ好みはちがうから「あっていいちがい」。
- ⑥ ある会社では、同じ仕事をしているのに、日本人の給料は15万円だが、外国人の給
料は12万円
同じ仕事をしているのなら、同じように給料がもらえないといけないと思うから「あ
つてはならないちがい」。
外国人だからといって日本人と差をつけるのは人種差別になるから「あつてはなら
ないちがい」。

〈まとめの場面〉

生徒達はそれぞれの事例に対し「性別や人種によって差別をするのはおかしい。」「人によって態度を変えるのはおかしい。」等ということに気付いていった。その上で深める段階の話し合いでは、共通点に着目して話し合うことで「あつてもよいちがいを認めない差別」と「あつてはいけないちがいを作ったり見過ごしたりする差別」という上位概念で括った見方ができるようになり、それらを無くす必要性に気付くことができたと考える。

これからは、今回の学習を踏まえて、自分との「ちがい」を認める寛容な態度と、差別的な「ちがい」は決して作らない・認めないという態度の両面を、実際の生活の中で磨けるように機をとらえて考えさせ、実践的態度を身に付けるようにしていきたい。